

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

アカデミア留学記 ①

～汗かき入試編～

内田 好美

校舎から一步出ると、水面に反射した陽光の眩しさに一瞬くらりとなる。まぶたを開くと、目に空と海が飛び込んでくる。正面にはジュデッカ島の街並みが水平に広がる。聞こえて来るのは船のエンジン音、打ち寄せる波、カモメの鳴き声。それから、観光客の様々な言葉のおしゃべり。カメラの前で思い思いのポーズを取る人たち。

そう、ここはヴェネツィア。

イタリアには来たくて来たわけだが、今、この地に住んで学校に通っていることを、自分でも何だか不思議に思う。ここに来ることができた幸運に感謝している。

今回の留学のきっかけは2014年に遡る。

「ボローニャ国際絵本原画展」と言うと、ご存じの方も多数いらっしゃると思うが、毎年、イタリアはボローニャで開かれる絵本の見本市に併せ、イラストレーションのコンクールが催される。その入選作品は、巡回展として世界中を周り、ありがたいことに日本にもやって来て、私たちは原画を直接、目に見ることができる。

毎年のように訪れていた兵庫県西宮市の美術館に、その年も私はやって来た。

一階を見終わって、階段を登り、二階の会場に足を踏み入れたその瞬間、正面の作品がパッと輝いた気がした。「これは！」と思った。

それは銅版画の技法でイタリアの教会を描いた一連の作品だった。作家は イタリアの銅版画家、トニー・ペコラーロ氏。



【ボローニャのアカデミア構内】

複雑な技法と繊細な描写。白と黒で表現された、光と影、イタリアの空気。私の目はこの作品に釘付けになり、しばらく動けなかった。素晴らしい作品を前にした感動、完成度の高さへの驚き、コンクール入選に対する憧れ、製作する人間として、自分の立場と比べた焦り。そういった様々な感情

を抱きつつも、この作風に見覚えのある気がしてならなかった。

帰宅すると即座に2011年のイタリア滞在時の写真を引っ張り出して来た。

「やはり」と思った。

それは、銅版画の画集の一ページを撮ったものだった。作家名、トニー・ペコラーロ氏。イタリアの都市、トリノの風景が、銅版画の技法を駆使し、自分なりの解釈で描かれていた。

2011年当時、私は銅版画を学ぶ為にフィレンツェの専門学校へ通っていた。

「こういう効果はどんな技法で得られるのだろう」「こんな風に自分も表現できたら」と、その時に見た、とある画集が気になって写真に収めていたのだ。

今回の展覧会で出会って強く惹かれた作品は、まさしく当のペコラーロ氏のものだったのだ。

それから、堰を切ったように2011年の留学当時のことが思い出された。

フィレンツェのアルノ川の向こう側。中心街から外れた静かな通り、蔦の生い茂った壁。元厩舎を改装した銅版画工房(学校)。重いプレス機のレバーを一生懸命に回したものだ。ピカソやヘンリー・ムーアの作品が飾られている下で制作に励んでいた私には、彼らが見守ってくれているような気がした。工房に充満するインクの匂い。よく使い込まれたヤスリ。鼻にツンとくる金属磨き粉。時々、校長先生が犬を連れて来られた。親切で、銅版画にかける情熱に溢れた先生方。出来上がった作品を批評してくれる仲間。みんなでパスタを茹でて食べたこともあった。

全てが懐かしかった。「もう一度、あのような環境で制作したい。イタリアに戻りたい。」そんな思いが込み上げて来た。

「日本でペコラーロ氏の作品に出会ったのは運命かもしれない。これはイタリアに再び行けということか」と、今回の「出会い」を解釈し、気がつけば、ペコラーロ氏の連絡先を調べ、拙いイタリア語でメールを送っていた。

— ボローニャの絵本原画展で、貴殿の作品を拝見し、甚く感動致しました。私も銅版画を嗜んでいる者です。是非とも個人的にご指導いただきたいと思います！—

と、弟子入りを迫るような内容で、今振り返れば恥ずかしいくらいなのだが、イタリア人には珍しく(失礼!)すぐに返答があり、

— 残念ながら、現在個人指導はしておりませんが、ボローニャのアカデミア・ディ・ベッレ・アルティ(美術学院)で教鞭を執っています。聴講生ですと制約は少ないので、授業は受けやすいと思います。よろしければお越しください。—

とあった。おまけに、ペコラーロ氏自ら書かれた技法書も PDF ファイルにして添付されていた。親切で、尊敬に値する人柄が推察できた。

私は、憧れのスターからファンレターの返事をももらったかのように、嬉々として、「聴講生なんて!ちゃんと受験し、正規の学生としてみっちり授業を受けさせてもらいますよ」と早速、渡伊の計画を立てようとした。これでまたイタリアとの繋がりができ、自分の銅版画の技術にも磨きかけられる気がして、舞い上がった。

しかし、留学までの道のりは決して平坦ではなかった。

私立の語学学校へ入学する場合とは違い、公立の大学や音楽院、美術学院の留学は、個人で直接学校へ申し込むことができない。仲介する機関から留学要項を取り寄せた後、東京で開催される留学説明会に参加することも必須だった。

翌年春の説明会を予約した。当日は会社を休み、新幹線で大阪から東京に向かった。煩雑な留学手続きの説明を聞いた。思っていた以上にややこしい。聞き逃すことがあれば、大変なことになりそうで、眉間にシワを寄せつつ、集中した。説明会の後には語学テストも受けなければならなかった。

それから、仲介機関に提出する書類を集めるために各地を行脚。卒業後約20年ぶりに出身高校を訪れ、卒業証明書もらった。市役所や外務省に出向き、初めて公証役場というところにも行った。次は、提出する書類の翻訳を指定の専門家に依頼。全ての書類と翻訳が揃ってから、また東京に出向き、面談をして書類を提出してきた。遠方の人には大変なことだと思う。

同じ頃、学校の受験案内が、希望するボローニャの美術学院のホームページに発表された。ア

ルファベットの洪水、まるで暗号のよう。見たこともない単語の羅列。アカデミックな専門用語。

学部ごとの試験内容と、受験に必要な申し込み書類についての箇所を、自分の持っているイタリア語の知識と辞書、それからネットの翻訳サイトを総動員して、汗をかきつつ解読した。すると、日本での手続きとは別に、学校にも受験申請が必要とわかった。なんと、東京に提出済の書類と直接学校に提出しなければいけない書類が、重複しているではないか！

「一筋縄ではいかないなあ」と思いつつ、東京に連絡して、優先的に書類を返却してもらえよう依頼したのだった。

提出書類の件は落ち着いたが、それからは試験の心配。「イタリアに行くぞ、ペコラーロ氏に会って、アカデミアで勉強するぞ」と最初は意気込んでいたが、入試に落ちたら元も子もないではないか。

入試要項によれば、外国人の場合、イタリア語の試験があり、これに合格すれば面接が続き、ポートフォリオ持参とのこと。アカデミアの他校生に聞くと、デッサンの試験があったそうなのだが、その記載がない。「美術学院なのに、本当にデッサンをしなくていいの？ポートフォリオって、どうやって作ったらいいの？語学試験のレベルってどのくらい？面接って、何を聞かれるのだろうか。」と、試験について現実に考えるようになると不安が募っていった。

9月の入試に向け、5月末にそれまで勤めていた会社を辞めた。もう後戻りはできない。7月には銅版画の個展をし、その後、手探りながらポートフォリオを作り、イタリア語の勉強。あっという間に渡航の日がやってきた。

余裕を持って入試のちょうど一ヶ月前の8月にイタリアに入った。学校のあるボローニャに家を借りたかったのだが、学生の街であるボローニャは売り手市場のため、なかなか頃合いの物件が見つからず(外国人にはハードルが高い、メールでの問い合わせには返信がこない等々)、結局、ボローニャ近郊の街、モデナに滞在することになった。

そして、迎えた入試当日。

よく眠れなかったまま、早起きして、ボローニャ

行きの電車のホームに立った。見ると、案内板には電車の遅れの表示が。

「まあ、イタリアでは普通さ、少くらい遅れても大丈夫。」と自分に言い聞かせた。

それが、10分遅れの表示が20分になったとき、嫌な予感がした。案内板から目を離せないまま、遅れが30分になったとき、自分が青ざめてくるのが分かった。

「このままでは、ボローニャに着いてすぐ走らないと遅刻する！タクシーに乗るか。いや、30分後に電車が来たらまだいいけれど」と、焦りがピークに達した頃、幸いにも別方面からのボローニャ行きの電車がやって来た。

学校には入試開始の15分前に到着した。

けれども、門は閉まっており、受験生たちが学校の前にたむろしていた。扉が開いたのは10分前。受験会場の案内表示がないので、守衛さんに尋ねつつ会場に向かった。

会場は学校で一番広い部屋と思しき講堂だった。椅子が並べてあったが、机は椅子に付属している小さなもの。壊れている机もあり、事務員さんがその瞬間にも修理している。「こんな場所で、試験を受けるのか」と思った。

入試開始時刻を過ぎても始まる気配はなく、試験官同士でおしゃべりをしている。遅れて来た受験者も会場に入って来る。やっと試験用紙が配られたのは、当初の予定時刻を20分を過ぎた頃。

試験内容は、まるでイタリア語検定のようなだった。イタリア語の文法は、動詞の活用が複雑で、私は活用を覚えるのが苦手だったのだが、勿論、それも出題されている。しかしながら、出題されている問題の答えとなる記述が他のページにあることに気づいてしまった。

「日本の入試とはずいぶん勝手が違うなあ」というのが正直な感想だった。

(続く)

(当館元受講生)

京都は巨大なルナ・パークか？

二宮 大輔

「ヴェネツィアは巨大なルナ・パークになった」と言われはじめたのは2000年代初頭だったのだろうか。ルナ・パーク(Luna Park)というのは遊園地のこと。もともとは1903年、マンハッタン島に開園して世界中に広まった遊園地の元祖なのだが、イタリアでは遊園地の総称として使用されるようになった。水の都ヴェネツィアは魅惑の観光地でありながら、不法B&Bが横行し、マナーの悪い外国人客に悩まされている。2016年には、ニュージーランド人の酔っ払い観光客が、リアルト橋から飛び込み、ボートに轢かれて重体になるという由々しい事故も起きた。



【リアルト橋】

出典元:https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Grand_Canal_-_Rialto_-_Venice_Italy_Venezia_-_Creative_Commons_by_gnuckx.jpg

私は観光ガイドを始めて三年になるのだが、この仕事をしていると、まったく同じことが京都という町にも当てはまるのではないかという錯覚に陥る。極端な事故や事件は今のところないものの、常に観光客で混雑している有名な神社仏閣には、もはや荘厳な雰囲気はなく、町全体が巨大なルナ・パークのように思えてくる。

例えば清水寺。随求大菩薩の胎内をイメージした真っ暗なお堂の内部をめぐる胎内めぐりは、2000年に本尊である千手観音を開帳した記念として開始した。また、同寺院の中にある地主神社は、縁結びの神さま大国主命が奉られており、片方の石からもう片方の石まで目を閉じたままどり着くことができたなら恋が成就するという「恋占いの石」なるものが設置されている。イタリア人観光客を連れて行って、これら一つひとつを説明しているうちに、違和感を覚えはじめた。まるで新たなアトラクションが増殖しているようだ。

とりわけ、それを顕著に感じたのは二条城だ。大量の金魚を用いたアートアクアリウム、夜間公開とプロジェクション・マッピング、現代アーティストのインスタレーションなどなど、最も精力的にアトラクションを取り入れているのではないか。来るたびに新しい仕掛けが準備されているといった感じだ。これはどういうわけかと不思議に思っていたところ、新聞の記事でデービッド・アトキンソンなるイギリス人の存在を知った。

オックスフォード大学を卒業し、1990年頃に来日。金融会社ゴールドマン・サックスに就職し、日本に特化した金融アナリストとして活躍。同社を退社後、国宝・重要文化財の修復を手掛ける小西美術工芸社に入社し、2011年に代表取締役役となった。2015年から京都国際観光大使、そして2016年には二条城特別顧問に就任している。

彼が一貫して指摘しているのは、日本には莫大な観光資源があるにも関わらず、宝の持ち腐れとなっているということ。これらをきちんと整備し、有効活用して、さらなる外国人観光客を呼び込み、文化財保護にかかる莫大な費用を自ら捻出しなければならぬというのだ。観光大使・特別顧問になったのはごく最近のことなので、一連のアトラクションの全てを彼が仕掛けたわけではないのだろうが、彼の主張に合致する形で、神社仏閣のルナ・パーク化が進行していることが分かり、新聞記事を読んで、とても合点がいった。

さっそくベストセラーになった彼の著書『新・観光立国論』(東洋経済新報社、2015)も読んでみた。「日本では『マナー遵守』の警告があふれすぎている」「文化財の解説では誰のために、何を伝え、何を理解してほしいかという視点を持つべき」

「スタッフがどれほど親切でも、マニュアル通りのサービスしかなければ一流ホテルではない」。どれも、観光ガイドをしていれば共感できる提言ばかりだ。

そして彼が最も強調しているのは、繰り返しになるが、文化財でお金を稼ぐことに否定的ではないということ。『自ら稼げる観光施設』に生まれ変わらせることで、自分たちで稼いだお金で、施設のメンテナンスや伝統文化の普及などを進めていく」ことが大事だという意見にも、深く頷ける。京都の中心地を歩いてみると、町屋が取り壊された空き地や、まさしく取り壊し中の工事現場が目立つ。町の様子が無残に変貌していくのをただ眺めているのではなく、アトキンソン氏のような発想で、文化や建築物を生き永らえさせる方法を模索すべきなのだ。

かくしてアトラクションを増やすような清水寺や二条城の戦略にも納得がいったのだが、それでもやはり、あまりにも安易にルナ・パーク化しているのではないかという疑念は完全には払えなかった。

どうということかと考えてみると、誰が悪いと言うのではなく、現地の人間と外国人観光客の距離感に原因があるのだということに思いいたった。

2年前の春、イタリア人観光客4名を連れて、東京の築地に行ったことがある。ここも言わずと知れた観光地なのだが、市場の核心部である場内では、朝5時ごろから卸業者と仲卸業者の間で競りが行われ、7時ごろから仲卸業者が買った魚を場内の店に出し、8時ごろに小売りの魚屋や料理店の人間が買いに来るといったシステムになっている。場内は11時ごろに店じまいとなるのだが、9時から約2時間のあいだ、一般見学も受け入れている。ただ朝の市場は真剣に魚の売買をする業者たちで殺気立っているし、商品を運ぶターレットトラックが、狭い通路を結構なスピードで行きかっている。

見学するには彼らの邪魔をしないよう、十分に気をつけなければならない。そこに大量の外国人観光客がやってくるから大変だ。もちろん外国人観光客も重々承知で気をつかっているのだろうが、職場にこのこと足を踏み入れられて好き勝手に写真を撮影されているように感じている業者た

ちは、明らかに嫌悪感を示している。

私が案内した時も、広大な場内に陳列された珍しい魚の数々を、とても興味深そうに写真に収めていたのだが、業者からは、舌打ち交じりに「こいつら邪魔だなあ」という声が飛んできた。日本語は分からないにせよ、雰囲気は察してもいいものだが、イタリア人たちは熱心に写真を撮り続けている。この時ほど、現地人と観光客の間に果てしない距離があるのを感じたことはない。両者にはまったく意思の疎通がなく、分かり合えないままだ。要因は写真撮影にあると思う。スーザン・ソントグの名著『写真論』（近藤耕人訳、晶文社、1979）にこのような一節がある。

写真撮影は経験の証明の道ではあるが、また経験を拒否する道でもある。写真になるものを探して経験を狭めたり、経験を映像や記念品に置き換えてしまうからである。旅行は写真を蓄積するための戦略となる。写真を撮るだけでも心が慰み、旅行のためにとかく心細くなりがちな気分を和らげてくれる。観光客は自分と、自分が出会う珍しいものの間にカメラを置かざるをえないような気持ちになるものだ。どう反応してよいかかわからず彼らは写真を撮る。おかげで経験に格好がつく。立ち止り、写真を撮り、先へ進む。



【スーザン・ソントグ】

出典元: https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Susan_Sontag_1979_%C2%A9Lynn_Gilbert_crop.jpg

携帯電話並びにデジタル機器の恩恵を受け、写真撮影という行為が極限まで簡易化された現代にあつては、旅行の目的自体が写真撮影と言えるほどだ。そんな状況の下、旅先で出会った珍しいものと自分との間にカメラを置くことで、観光客と現地の関係性は、撮影者と被写体という物質的なものとなり、結果としてこの果てしない距離感が生まれるのだ。つまり、築地の業者、祇園の舞妓、その他様々な被写体と距離ができてしまうのだ。そして、現地の人々と観光客の間に生じるこのような乖離を放置しすぎた時、町はアトキンソン氏が提言するような「自ら稼げる文化財」の範疇を越え、節度を失ったルナ・パークになり下がってしまうのだと思う。

それを回避するため、即ちこの果てしない距離感を埋めるために、我々観光ガイドが存在すると言ってもいいはずなのだが、日々イタリア人観光客を相手にしていると、このミッションの難しさを痛感する。例えば、神社で結婚式を挙げている和装のカップルなど、珍しい被写体を目にした時の、彼らの写真撮影への反応は恐ろしく速い。それが悪いとは言わないが、のべつ幕なしに撮り続けていると、先述のような距離感が生まれることは十分に知っておかなければならないだろう。

ところで、イタリアで観光といえばゲーテの『イタリア紀行』を連想される方も多いのではないだろうか。太陽と豊かな自然に彩られたイタリアに憧れ続けていたゲーテは、1786年、37歳の時、仕えていたアウグスト公に暇乞いをして、2年間にわたるイタリア滞在を敢行し、北イタリアからローマ、ナポリ、シチリアまでを周遊する。後に当時の日記と書簡をまとめたものが『イタリア紀行』となるのだが、その記述は常に興奮と感動に溢れている。例えばナポリについての記述はこうだ。

この晴れわたった碧空の下では、どんなものも決して派手すぎるといふことはない。というのは、いかなる物も、太陽の光輝と海に映じた反射とを凌駕することができないからだ。



【ゲーテ イタリア紀行】

出典元:[https://it.wikipedia.org/wiki/Viaggio_in_Italia_\(saggio\)#/media/File:Johann_Heinrich_Wilhelm_Tischbein_-_Goethe_in_der_roemischen_Campagna.jpg](https://it.wikipedia.org/wiki/Viaggio_in_Italia_(saggio)#/media/File:Johann_Heinrich_Wilhelm_Tischbein_-_Goethe_in_der_roemischen_Campagna.jpg)

間近で見ていると、現在の観光客の感動も、ゲーテのそれに引けを取らないのではないかという印象を受ける。ただその感動を切り取るのに、もちろんゲーテのように日記に書くわけではなく、手っ取り早く写真に収めるという手段に出してしまうため、時にそれが、ルナ・パーク化という問題を顕在化させているのだと思う。2020年の東京オリンピックに向けてますます観光が盛んになっていく中、私もひとりのガイドとして、イタリア人観光客が現地と良い距離感を保って日本を楽しめるよう努力していきたい。

(翻訳家/当館元受講生)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>